

# 霞

## - 2008年度冬季展示室だより - 土浦市立博物館 平成21年1月5日発行 (通巻第6号)

土浦市立博物館では春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに実物資料の展示替えを行っています。本誌「霞(かすみ)」は、折々の展示資料の見どころをご紹介します。また、展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

### 目次

古写真・絵葉書にみる土浦(6)・・・1
博物館からのお知らせ・・・1
【2008年度冬季の展示資料解説】
土浦出土の古代銭(古代)・・・2
「小田みかたのちり」(中世)・・・3
「亀城遺珠」(近世)・・・4
江戸の古今雑(近世)・・・5
「大洪水文集」(近代)・・・6
市史編さんだより・・・7
「霞」短信・・・8
コラム(6)博物館と光の話・・・8

### 古写真・絵葉書にみる土浦(6) 「土浦八景 旧城の暮雪」



土浦八景と題された一葉。明治時代末期から大正時代前半に制作された絵葉書。お堀のわきにたたずむ人がさす蛇の目傘が印象的である。土塁越しにみえている建物は櫓門の上層。土塁上に現在は復元された東櫓が立ち、白壁がめくっている。【情報ライブラリー検索キーワード「旧城の暮雪」】

## 博物館からのお知らせ

「わたからもめんへ」はたおり教室・むいむい糸紡ぎの会・綿の実 手織り展

2月21日(土)～3月1日(日) はたおり教室・卒業生による作品展示、はたおり体験もできます。

はたおり体験 1/24・1/31・2/7・2/14(いずれも土曜日) はたおり体験は予約が必要です。

館長講座「常陸国風土記の世界」 1/25・2/15・3/22(日)午後2時～ 茂木雅博館長

## 第30回特別展「沼尻墨僊 - 城下町の教育者 - 」 3月21日(土)～5月10日(日)

特別展展示解説会(予定) 3/28、4/4、4/18、4/25、5/2(いずれも土曜日、午後2時～)

連続歴史講座「墨僊塾」 1/10「墨僊の天体観測」、2/14「西杖日記にみる漢詩」、3/21「西杖日記にみる和歌」、4/11「知られざる墨僊展」(展示案内)、5/9史跡めぐり「墨僊の足跡をたずねる」(土曜日)

休館日のお知らせ 月曜日、1/13(火)、2/11(水)、3/20(金)

特別展の展示作業にともなう臨時休館日 3/17(火)～19(木)、5/12(火)～15(金)

今春は展示室3で特別展「沼尻墨僊 - 城下町の教育者」を開催するため、2009年度春季展示「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」は5月16日～6月中旬までとなります。「霞」第7号は5/16発行予定です。

お知らせ欄の日程は一部変更となる可能性があります。

# 土浦出土の古代銭

## 最古の貨幣のあり方

秋季展示の中世「埋蔵銭」に引き続き、今回はさらにさかのぼる古代の銭をご紹介します。日本において金属製（おもに銅製）の貨幣、「銭」がはじめて造られ流通するのは、奈良時代以前の7世紀後半頃まで遡ることが明らかになってきました。1999年、奈良県飛鳥池遺跡で発見された「富本銭」が日本で最も古い銭と考えられています。

土浦市内の出土例を紹介すると、奈良時代（8世紀）では弁才天遺跡から1例、平安時代（9～10世紀）では石橋北遺跡、扇ノ台遺跡、寺畑遺跡から各1例、計4例の古代銭が出土しています。弁才天遺跡は大字常名、桜川左岸の台地上にある古墳時代前期から平安時代（4～10世紀）の集落跡で、古代の筑波郡、河内郡、茨城郡のちょうど境目あたりに位置しています。奈良時代の竪穴住居跡から、和同開珎1枚が出土しています。銭は住居のカマドの脇から、壊れたカマドの粘土に覆われて出土したことから保存状態もよく、「和同開珎」の文字がはっきりと読み取れます。年代は8世紀前半頃と考えられ、和同開珎の鑄造開始が和銅元（708）年なので、この銭は造られてあまり時間がたたない内に埋められたものと思われる。県内で奈良時代の遺跡から銭が出土したのはわずかに2例（もう1例はつくば市明石遺跡）、本例はきわめて貴重な資料といえます。

石橋北遺跡は、市内田村・沖宿遺跡群にあり、霞ヶ浦土浦入り北岸の谷津に面する台地上に位置しています。奈良～平安時代の集落跡で、倉庫などに使われた掘立柱建物跡が50数棟も発見され、この地が古代の茨城郡大津郷に当たることから、内海の港に附設された物資の集積場所ではなかったかと考えられます。銭は、平安時代前半頃（9世紀後半頃）の竪穴住居から出土した神功開寶1枚で、住居内のカマドの前から出土しています。神功開寶は、和同開珎の10倍の価値の銭として、天平神護元（765）年に造られ始めています。扇ノ台遺跡は、大字中、花室川左岸に面する台地上にある奈良～平安時代（8～10世紀）の大規模な集落跡で、郷家など古代の郷（信太郡中家郷？）の拠点集落ではないかと考えられます。石橋北遺跡と同じく、平安時代前半頃の竪穴住居内から神功開寶1枚が出土しています。寺畑遺跡は、石橋北遺跡と隣接して営まれた同時代の遺跡です。古代の集落内に、四面に庇の付く仏堂と思しき建物跡や僧房と考えられる長屋風の建物跡などが発見されており、石橋北遺跡の倉庫群と共に大津郷の中核集落を形成していたと考えられます。銭は、平安時代中頃（10世紀前半頃）の竪穴住居の壁際から、弘仁9（818）年に初鑄された富寿神寶1枚が出土しています。

このように、土浦市内から発見された古代銭は、すべて集落内の竪穴住居から出土しています。竪穴住居に住む一般庶民層にまで、すでに銭が普及し流通していたのでしょうか。どうもそうとは言い切れないようです。古代銭が発見された集落は、いずれも大規模な拠点集落で、物資の集積地や仏堂など特別な性格を持ち合わせています。また東国では、弁才天遺跡や石橋北遺跡のようにカマド近くや、家の四隅や床下など、銭は竪穴住居の特定の場所から多く出土しています。住居の建築や廃棄に伴い屋敷神やカマド神を祀るなど、古代東国において銭は、経済的流通の側面より、祭祀的な用途での利用が多かったのではないかと考えられています。

（塩谷 修）

左から弁才天遺跡出土「和同開珎」、  
扇ノ台遺跡出土「神功開寶」、  
寺畑遺跡出土「富寿神寶」



このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を1/24（土）午後2時から開催いたします。



# 「小田みかたのちり」国宝 上杉家文書(複製品)

## - 小田氏最後の勢力を支えた諸将たち

長尾景虎(後に上杉輝虎、入道して謙信1530~1578)は、永禄4(1561)年に鎌倉の鶴岡八幡宮で上杉憲政から正式に関東官領職と上杉の名跡を譲られ、以後、関東の秩序維持という名目のもとに関東への出撃を繰り返すようになります。こうした事から、常陸国の諸将たちは、謙信の関東進出に大きな影響を受けることとなりました。

常陸国南部の領主小田氏治は、永禄4年の時点では謙信の味方として「関東幕注文」に名を連ねています。(「霞」第4号を参照)しかし、翌年氏治は、北条氏康と同盟関係を結び、謙信に敵対することとなりました。これにより、永禄7(1564)年1月、3度目の関東出兵を行った上杉輝虎は、佐竹義昭・宇都宮広綱とともに小田氏の居城である小田城を攻略して氏治を敗走させています。

この時、輝虎が氏治に味方した諸将を調査したものが「小田みかたのちり」で、何れも城主格と思われる9名が記されています。

土浦、菅谷摂津守(政貞) 木田余、信太伊勢(守) 戸崎、菅谷次郎左衛門 六倉、菅谷右馬允  
 谷田部 同東輪寺、岡見弾正(治資) 近藤治部 牛久、岡見山城(守) 豊田、左衛門尉(治親)  
 土岐、大膳太輔(治英)

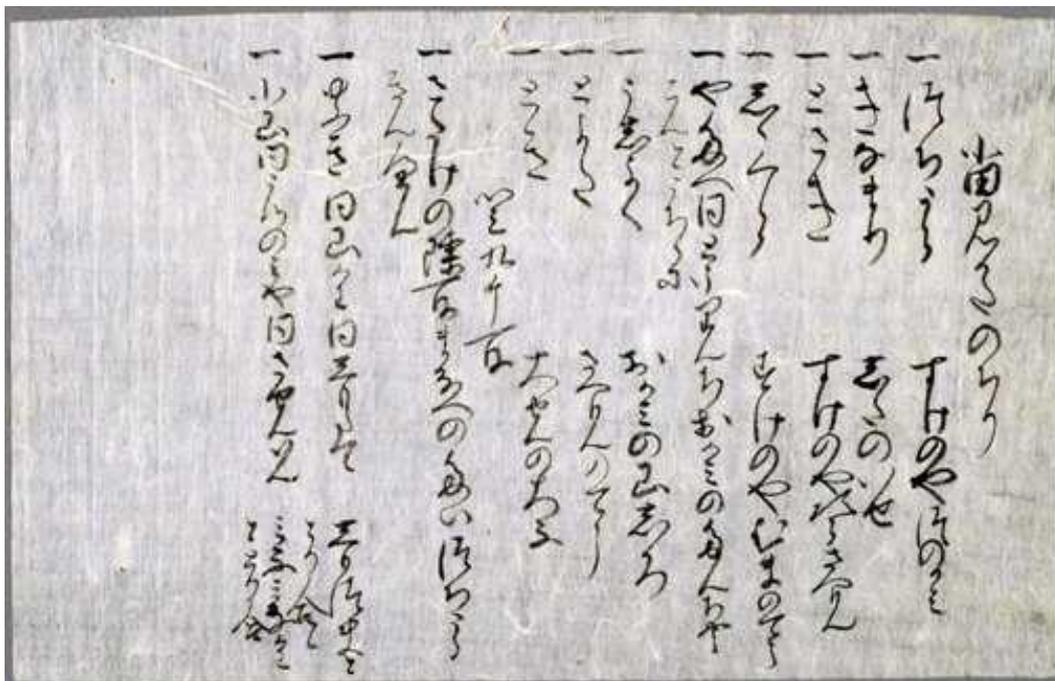
また、「以上九ヶ所」を上げた後には、佐竹義重が土浦城近辺の真鍋台に陣を構えている、結城晴朝・山川氏重・水谷政村が多賀谷政経と争っている、小山秀綱・宇都宮広綱・座禅院昌慶が壬生義雄・皆川俊宗と争っている、などの戦の情勢をも記しています。

その後、氏治は永禄8(1565)年12月に小田城を回復していますが、翌年の2月には再度上杉軍と佐竹軍に攻撃され小田城から敗走しています。幾度となく繰り返された小田城をめぐるの攻防戦は、小田氏の勢力

を徐々に弱めていきました。このような中で永禄7年に記された「小田みかたのちり」は、戦国期の常陸国南部の領主的存在であった小田氏の勢力範囲を知るうえで大変貴重な資料といえます。

(中澤達也)

国宝 上杉家文書  
 「小田みかたのちり」  
 複製品(原資料は上杉博物館所蔵)



このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を2/7(土)午後2時から開催いたします。



きじょういじゅ  
「亀城遺珠」

- 短冊コレクション -

短冊とは、縦 36 cm、幅 6 cm ほどの大きさの和紙で、和歌や俳句を書くのに用います。地紙が着色されたものが多く、中には金銀箔や下絵、模様が施された豪華なものもあります。写真の短冊には青い模様が霞のように入っています。

「夕栄や 陽炎くゆる橋ばしら 墨僊」

「銭亀橋の夕焼け時、橋脚には水面からの反射光が陽炎のようにゆらめいている（もう春だ）」と詠んだのは沼尻墨僊（1775～1856）で、土浦で塾を営み、500名を超える筆子を育てた人物です。（博物館では第30回特別展「沼尻墨僊 城下町の教育者」を3月21日（土）から開催します。）短冊に書かれた文字を丹念に追うと、墨僊の筆運びが伝わってきます。墨跡の字形や字配り、墨色、緩急などから受ける印象はさまざまです。「書は人なり（書は人格を表す）」といわれるのは、書かれた内容に劣らず、書そのものに筆をとった人の思いや考え、気質の一面が如実に表れる場合があるからでしょう。

さて、江戸時代に庶民に浸透した漢詩や和歌、俳句の世界では、同好の人々が集まって歌を詠み、短冊に書いて発表する歌会が頻繁に行われました。江戸時代から近代にかけて、土浦近辺の人々による和歌や俳句の短冊はかなりの数に上るはずで

土浦生まれの郷土史家故寺嶋誠斎（1898～1980）はそんな短冊を集め、丁寧に台紙にとめつけ、一冊の折本に仕立てました。土浦藩主に始まり、藩士、町人、僧侶など、江戸時代後期から明治・大正期にわたる176本の短冊が収められています。誠斎は緒言で次のように言います。

「（短冊の）模様の色々、筆蹟のさまざま、俳句の思い思いなる、殊に眼にふれたく心に感ずるは色彩の各々異彩なるにそある。歌に仮託されて吐露される先人たちの思いを筆跡や料紙からたどることができる短冊を、誠斎はこのほか愛していたようです。墨僊も、青い模様を陽炎の揺らめきに見立てて短冊を選んだのかもしれませんが。

誠斎はこの折本を「亀城遺珠（土浦城ゆかりの人々が遺した珠玉の作品）」と命名して座右に置きました。このため短冊は散逸することなく、現在は博物館の所蔵品となっています。私たちが目にすることができる歴史資料の背景には、歌を詠み、書き残した人々だけでなく、それを守り伝え、集めて引きついでくれた人々の存在を忘れることはできません。（木塚久仁子）

左：「亀城遺珠」表紙 寺嶋誠斎書

右：緒言と土屋寅直筆短冊



このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を1/31（土）午後2時から開催いたします。



こ き ん び な  
江戸の古今雛

- 江戸製の雛人形 -

文化の中心が次第に上方から江戸へと移った江戸時代後期、それまで雛人形制作の中心地であった京都に代わって江戸でも制作が盛んになり、江戸オリジナルの雛人形が生み出されました。それが古今雛とよばれるもので、二代目原舟月（1767? ~ 1844）によって大成されました。わたしたちが目に見ている現代の雛人形の多くは、この古今雛の流れをくんでいます。

古今雛の特徴は、玉眼とよばれるガラスをはめた目や、浮世絵に描かれたような江戸美人風に仕立てられた写実的な顔立ちです。雛人形に玉眼を入れる技法を取り入れたのも二代目原舟月といわれ、山車人形の技術を応用したとされます。また、衣装はそれまでの有職によらない装飾性に富むものとなりました。

当館の古今雛を調査していただいた是澤博昭さん（大妻女子大学）によると、写真の雛人形も典型的な江戸製のものだそうです。女雛の冠には白色を中心とした飾りがさげられていますが、これも当時の江戸雛に多くみられる江戸好みのすっきりとした色使いとのこと。江戸では原則8寸（約24cm）以上の高さの人形をつくることは禁止されていましたが、当館所蔵のものは像高が約30cmもあるやや大きなものです。また、胴部の素材は既製品に多くみられるような藁ではなく木製であることから、オーダーメイドの高級品であったと考えられます。このような古今雛は主に江戸の上層商人が購入したようです。残念ながら当館の古今雛の詳しい来歴は不明ですが、江戸とのつながりを有する土浦城下の商家が発注してつくらせたのかもしれませんが。

ところで、近年、江戸の人形文化に関する研究が進展をみせています。当時の名工といわれる人形師は雛人形だけではなく、山車人形・五月人形・木彫りの置物、さらには根付と客の求めに応じてさまざまなものを制作していました。なかでも大型で人々の注目を集めた山車人形は、江戸の人形師がもっとも丹精を込めてつくった作品でした。かつて大町（現：市内大町）で使用され、現在は東京都青梅市本町が所有する山車人形の作者は三代目原舟月です。また、中城町（現：市内中央1丁目）の山車人形の作者は、最後の江戸の山車人形師と称される古川長延です。近世の土浦は江戸の文化的影響を強く受けた城下町でした。こうした江戸の人形師たちが残した作品を調査していくことから、土浦と江戸との文化的なつながり考えるヒントが得られるのではないかと思います。

（萩谷良太）

「第5回 土浦の雛まつり」は2月14日（土）～3月3日（火）まで。土浦まちかど蔵と周辺の商店街で雛人形が展示されます。博物館の雛人形とご一緒にご見学ください。



江戸時代後期の雛人形（当館所蔵）

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を2/28（土）午後2時から開催いたします。ご紹介した資料は3月3日（火）までの公開となります。



# 「大洪水文集」

## - 土浦小学校に残された洪水の記録 -

洪水は集中豪雨のニュース映像などでも惨状を知る機会がある、身近におこりうる災害のひとつです。しかし、最近の土浦では大きな洪水による水害の報道はほとんどありません。水害がおこりにくい地域なのでしょう？答えはNOです。霞ヶ浦の逆水や桜川の氾濫により、土浦は近世から近代にかけて洪水の被害に度々見舞われてきました。その教訓をもとに水門の整備や桜川堤防の強化などがなされ、現在に至っているからなのです。

土浦の洪水の歴史の中でも特筆されるのが、昭和13(1938)年の洪水です。この年の6月28日から30日にかけて、台風の接近に伴う激しい雨が降り続き、ついには桜川が氾濫し、中心市街地が水浸しになってしまったのでした。水が引くまでには23日もかかり、土浦町内(旧城下町に相当)では9割以上(5,089戸中4,789戸)が床上浸水という大災害となりました。

「大洪水文集」はこの昭和13年の洪水を土浦尋常高等小学校(現土浦小学校)の子供たちが記した作文集です。出版されたものではなく、作文自体を綴ったもので、学年ごとに複数冊にまとめられ、尋常科1年、2年、3年、4年(女子)、5年、6年、高等科(女子)の作品が確認できます。おそらく全校生徒に課せられた作文であったでしょう。

作文からは6月29日に授業が打ち切りになって以降、短期間のうちに子供達が非常事態に遭い、事態の深刻さに恐怖感を味わっていく様子がわかります。しかし同時に子供ならではの視線で日常を切り取ってもあります。水がずっと引いてからは舟にのって遊んだこと、昼間は泥水で汚い感じの水景色が夜はきれいであったことなど、子供らしい素直な表現が登場しています。作文の提出日は9月の上旬から下旬であり、水害の記憶がさめ

やらない時期に課題となったようです。原稿用紙で数行のものから20枚を超える長編まで様々です。未曾有の出来事を記すということに重きを置いて、作成期間は長めに、枚数は自由にしたのかもしれませんが、子供達は思いのままに鉛筆を走らせているようにも感じられます。

当時の洪水を記録するものは、ほかに新聞報道や写真絵葉書などもありましたが、いずれも大人の視線での記録といえます。子供からみた洪水の記録であるこの作文集は、新聞報道などとは異なる災害記録として貴重な資料といえるでしょう。現在博物館では『土浦の洪水記録 - 先人が語る水とのたたかい』(2009年春刊行予定)を編集中です。「大洪水文集」からは4作品を収録しますので、本が完成しましたら、ぜひごらんいただきたいと思います。(宮本礼子)



「大洪水文集」土浦市立土浦小学校所蔵

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を3/7(土)午後2時から開催いたします。





「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。今号は、墨僊塾第4回目の講師もお勤めいただいた青木光行さんに沼尻墨僊をご紹介します。

## 塾「天章堂」と沼尻墨僊について

「天章堂」は、近世土浦の人沼尻墨僊が、寛政の頃に開いたといわれる寺子屋であり私塾でもある教育機関です。子の墨潭に受け継がれ、土浦小学校が創設されるまで、土浦を代表する庶民の学校でした。

墨僊は幼少より慧敏穎悟(才知がすぐれてかしこいこと)といわれ、その人となりについては、「性温厚篤実、居常寡黙にして、才能を誇らず、来り学ぶものあらば、諄々(ねんごろに教えるさま)としてこれを教へ、必ず二回ずつ反覆するを常とした」(乙竹岩造著『日本庶民教育史』中巻)とあり、遠近の子弟その風を慕って入門者多数、盛況を極めたとあります。また「町方子供筆学世話」と孝養を以て藩の褒賞を受けること三度、「慈厚殆んど仏の如く、母に仕えて至孝、郷党の典型として敬慕された」(香草生著「市隠の科学者沼尻墨僊翁」)とあります。

墨僊は八十余年の生涯を「市隠の一布衣(庶民)」として過ごしています。没後、土浦藩士山村才助とともに地理学の先覚者として評価され、土浦小学校編纂『土浦郷土読本』にもその業績が紹介されています。

しかし、近世土浦を代表する偉大な人物にもかかわらず、その生涯や業績、「天章堂」の教育について、ほんの一部を知るのみです。墨僊の生涯や交遊、塾の教育、地理学、天文暦学や科学、書道、絵画、漢詩文、和歌俳諧文学など、あらゆる分野の史料の発掘・蒐集、調査研究が待たれます。

博物館企画の連続講座「墨僊塾」は墨僊解明の糸口であり、墨僊に関する特別展の展示を心待ちにしている一人です。

青木光行(元土浦市史編さん委員)

### コラム(6) 博物館と光の話

「展示室が暗いので明るくしてください」との声をよく耳にします。たしかに博物館(美術館)の照明はうす暗くなっています。これは強い光による資料の退色を防ぐため、資料保存を目的とする博物館などではごく一般的に行われていることなのです。ただし、いきなり暗い展示室に入ると目が慣れないので鑑賞しづらいのは確かです。そこで、展示室に入る前の通路や部屋を暗くして、あらかじめ目をならしってもらう隠れた工夫があります。たとえば当館のエントランスホール。一見すると開放的な空間ですが、じつはガラス面に遮光フィルムが貼ってあり、外からさしこむ光を制限して全体の照度を落としています。

また、展示ケースで使用されている蛍光灯は博物館・美術館用のもので、資料を傷める要因となる紫外線が放出されないよう特殊な加工が施されています。新しく導入した展示ケースの上部には、照明が発する熱がケース内に直接伝わらないよう熱切りガラスを設置。光と上手につきあいながら資料の保護につとめています。(萩谷良太)

### 情報ライブラリー更新状況

【2009・1・5現在の登録数】

古写真 411点(+8)

絵葉書 306点(+22)

( )内は2008年10月1日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真もご覧いただけます。

霞(かすみ) 2008年度

冬季展示室だより(通巻第6号)

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

2009年度春季展示は特別展開催のため2009年5月16日(土)スタートとなります。「霞」2009年度春季展示室だより(通巻第7号)は5月16日発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。